



令和8年度 幼児教育研修（資質向上研修）

「子ども主体の保育をつくる保育者のかかわり」

日時：令和8年6月11日（木）14：45～16：45

会場：足立区生涯学習センター

講師：東京学芸大学 総合教育科学系 教育学講座

幼児教育学分野 准教授 平野 麻衣子 氏



子ども主体の保育ってなんだろう？

主体・主体性とは

●主体性とは（川田学氏）

その子どもが周囲の他者や環境、そしてときには自分自身との間に結んでいるいろいろな関係の状態。主体性を尊重する保育とは「子どもと人・もの・こと・自分自身のとのつながりを応援すること」

（2019）発達の保育論のはじまり：個人を尊重しつつ、「つながり」を育むいとなみへ ひとなる書房

●主体性の感覚（恩蔵絢子氏）

自分が自分でいいという感覚

自分が世界に影響を及ぼすことのできる存在という感覚

（2025）感情労働の未来：脳はなぜ他者の“見えない心”を推しはかるのか？ 河出書房新社



事例から考えてみよう：アイスクリーム屋さんの名前何にする？（5歳児）



一人一人何アイスが食べたいか聞いて買い物がしたい！

→好きな遊びの時間に注文を取り、18種類のアイスを買に行く

お店をつくる

・ゴミ箱置いてあったよ

・メニュー掲示づくり

→メニューが、ここ！ってわかるようにすればいい

お店の名前は どうする？

A「〇〇アイスは？」

B「アイスはサーティワンの本物ので、本物を売るのがに名前が違うのはおかしくない？」

C「ところで、サーティワンってなに？」

保「アイスが31種類あるってことかな」

B「ぼくたちのは何種類ある？」

D「18種類」

E「じゃ18だ」

F「先生、18は英語でなんて言うの？」

保「エイティーンだよ」

F「じゃ、エイティーンアイスだ！」

みんな「さんせーい！」

お店の名前にズレがあることに気付いた子どもがいた

お店の名前の由来に気付いた子どもがいた

《実践事例から学んだこと》

隙間・・・「あーでもない」「こーでもない」とできる隙間時間がある

多様・・・声が生まれる・声が受け止められる
→対話がある

身体・・・言葉のやりとりの面白さ、リアルさ、ファンタジーなどに気付いていく
→身体を介してわかっていく

行事のデザイン



ねらいは、経験してほしい内容＝活動名ではない

例：子どもに聞いてみた

→こどもの日に毎年こいのぼりを飾らないとダメ？
どんなふうにこどもの日を迎えたい？

・本物の兜を飾りたい
・柏餅つくりたい
・しょうぶ湯に入りたい
・こいのぼりになりたい

・選択肢は1択ではない。他の選択肢もある。
・～するという達成目標ではない。
・こいのぼりをつくるのがねらいではない。
・ねらいは、端午の節句に親しむ・味わう・楽しむ

これから・・・

・園生活の自然の流れの中で生活に変化や潤いを与えるもの
・教育的価値を十分検討し、適切なものを精選し、幼児の負担にならないようにする。（過度な目的化を避ける）

「毎年している」「決まっている」からスタートするのではなく、子どもの経験から考える。

つまり・・・

前後のつながりをデザインする





狭義では教育課程を指すが、学びの経験の総体・学びの履歴を指すように（広義）

先立って準備された計画を、こどもはどのように経験したのか（事後的にわかること）という視点と、子どもは「意味をつくり出す主体」という視点が入る

ジョン・デューイ：2種類の地図に例えて表現すると・・・

年齢が小さいほど、心理的側面に対する配慮が必要（加藤氏）

心理的側面

探検家ができる限り最適の方法で自分の道を発見し、道しるべをつけて、新しい土地に印をつけながら作る地図

論理的側面

その土地が完全に探検しつくされた後に構成され、最終的に仕上げられた地図

子どもたちにとって、園での生活は、探検家が初めて描く地図（デューイのいう1つ目の地図）

一緒に探検する保育者は、「最終的に仕上げられた地図」を頭の中におきながら実践を展開（デューイのいう2つ目の地図）

どこへ行くのかわからず、見るもの全てに興味をもち、あちこち寄り道立ち止まりながら子どもたちは歩いていく。その1回限りの体験を豊かに味わせていくことが大切。

子どもとの間に作り出される偶然性と一回性に基づく実践をドキドキするような感覚とともに展開していく。しかも、道を知らないふりをして演技するのではなく、一緒に驚き、不思議がり、面白がりながら共に活動を創造していくことも大切。

（2007）対話的保育カリキュラム（上）理論と構造 ひとなる書房

自分の実践の中にすきまはありますか？

～保育の中の隙間～

時間的隙間・・・活度と活動の間・行事と日常の間・学年の移行期・個人のリズムと集団のリズムの間

空間的隙間・・・室内外の場所で何の意味もなさそうな空間・多機能・多目的で変幻自在な空間・雑多・空間

対人的隙間・・・保育者と子ども・子ども同士・保育者同士・人と人との関わりの間・園外の他者の入る隙間

- ★主体性を発揮しながら子どもたちは動いている。子どもたちの様子をじっくり見よう。声は言葉だけではなく、全ての表現が子どもの言葉である。
- ★隙間で起きていることに価値を置いて子ども目線でじっくり見ていくと・・・
 - ・子どもの主体がみえてくるのでは？
 - ・多様な価値が潜んでいるのでは？



なぜ子ども主体の保育を目指すの？ それを学び・ともに考える理由は？

幼児期は多様な価値を伝える教育

隙間を開けて子どもの発想、個々の考えが表れるように、違いがあるのは当然。ぶつかることもあるのは当然。問題がある、上手いかわない前提で物事を考える。何とかやりくりする、工夫する、知恵を出し合う。そういう生きる基盤を培う時期

保育職という仕事の魅力

- ★保育者も真剣に遊ぶ・知る・考える
子どもの声を聞いて実現できるようにすることは大事だが、保育者もその遊びに入って一緒に遊び、アイデアを出すことで遊びも広がりを見せていく。
- ★身体的な感覚を通して人とつながる
「自分がいい」「世界に影響を及ぼすことのできる存在」という感覚

研修生の報告書より

- 自分の保育を想像しながら講義を聞き、主体的になるように意識し過ぎて道を作り過ぎていくこともあるなど感じた。特に隙間の話から、片付けの間に子どもたちが様々なことを思ったり、小さな確認などをしていたり、片付けの中にも子どもの主体はあって、時間がかかることも意味があったり、一見指示したこととは違うことをしているような時でも、時には子どもの視線や動きに注目することで、保育者も新たな発見や子どもの成長をより見ることができると思った。

- 子どもを主体とした保育とはどのようなものなのかを実践例を挙げた講義だったので、とてもわかりやすかった。つい保育計画や年間、月間カリキュラムに基づいて一日の保育を組み立ててしまいが、「子ども主体の保育」とは、子どもと人、もの、こと、自分自身とのつながりを応援することだと学び、保育士は子どもの遊びの先導役になるのではなく、子どもの気づきや興味、関心に心を寄せて、共に驚き、感動し、考え、共感しながら一緒に活動を創造していく保育を実践していきたいと思う。そのためには、今までの経験を大切にしながらも柔軟な考えを持ち、新しい発想と視点に立って、今までの経験に捉われないことなく、常に新鮮な気持ちで子どもたちと関わっていく。そして子どもたちと一緒に楽しい保育をしていきたい。